日本建築学会中国支部研究報告集　第42巻
平成31年3月

# 地方都市における伝統工芸品関連施設の整備方針に関する研究
## ―久留米絣を事例として―

準会員　中村　湧志
正会員　牛島　朗
正会員　岡松　道雄
正会員　孔　相権

地方都市　伝統工芸　久留米絣
施設整備　地域振興

### １．はじめに

現在地方都市は人口の減少や少子高齢化の影響を強く受け、経済縮小等の厳しい状況下にあり、政府は地方創生を政策に掲げ２０１５年に「まち・ひと・しごと創成基本方針」を発表している。厳しい状況下にある地方都市であるが、固有の伝統文化が色濃く残っているのも地方都市である。その中で具体的な手法としていかに伝統産業の改善を行い地域に活力を与えるかが課題となる。

これまで米光や関根による、伝統工芸品の現状や課題について研究されたものは多く見られるが、解決策の提案には至っていない。また、伝統工芸品に関連する施設に着目して行われた研究は見られない。

そこで本論では福岡県久留米市を中心に作られてきた久留米絣の生産体制や周辺状況を調査対象とし、立地環境や関連施設の観点から考察することで具体的対応策を見出すことを目的とする。

### ２．久留米絣の概要

#### 2.1 久留米絣について

久留米絣は、江戸時代の終わり頃、今から約200年前、井上伝が考案した。絣織物はタテ糸またはヨコ糸のみに絣糸を用いるのが一般的であるが、久留米絣はタテ・ヨコ糸両方に絣糸を用い、絣を合わせて織りながら柄を作る、全工程に手間と時間がかかる。世界的にも希少な織物で、制作には緻密な計算と卓抜した技量が必要な、日本を代表する芸術的な織物である3)。

#### 2.2 重要無形文化財に指定されている技術について

久留米絣は 1957 年に、木綿では初めて国の重要無形文化財として指定された。指定要件が無形の「わざ」そのものであるため、その「わざ」を高度に体現している人または団体を保持者または保持団体として認定している。認定条件は以下の３つ。

１．手括りによる絣糸を使用すること。
２．純正天然藍で染めること。
３．なげひの手織り織機で織ること。

上記方法で製作し、検査に合格したものが、「重要無形文化財」の証紙を貼られ、市場に出荷される。厳しい条件を満たして作られる重要無形文化財久留米絣は、機械織りの生産数 83097 反に対して 50 反で 0.06%と、非常に限られた数しか織られない、貴重なものである4)。

一連の工程を図１に示す。

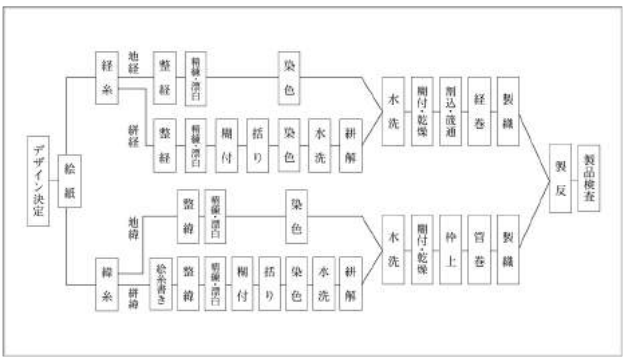



図１:伝産品の工程フロー

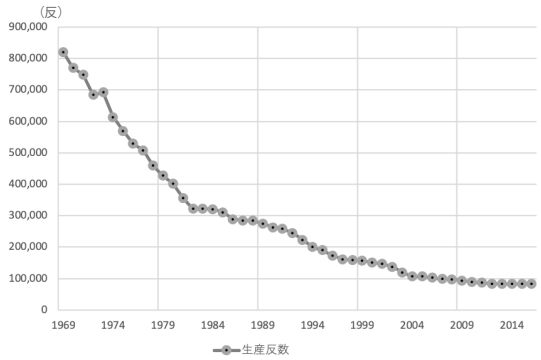



図２:久留米絣全体の生産反数
（久留米絣組合提供データより作成）

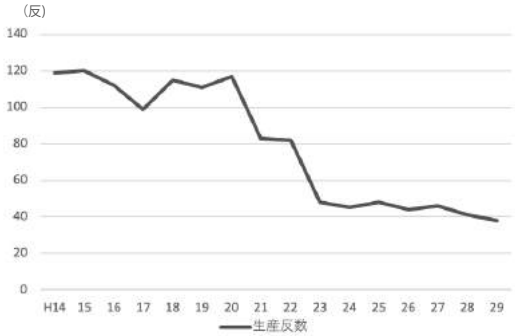



図３:手織りの久留米絣の生産反数
（久留米絣組合提供データより作成）

A study on facility supply of traditional crafts in local area.
- A case study of KURUME KASURI-

NAKAMURA Yushi, USHIJIMA Akira, OKAMATSU Michio and KOH Shoken

表１：工房現状

| 氏名 | 住所 | 技術者人数 | 後継者 | 対外活動 |
|---|---|---|---|---|
| A工房 | 八女郡広川町 | 6 | ○(息子＋外部から○ ) | テレビ出演有り、小中学校への特別授業有り |
| B工房 | 八女郡広川町 | 3 | △ | |
| C工房 | 八女郡広川町 | 2 | × | |
| D工房 | 八女郡広川町 | 1 | × | |
| E工房 | 八女郡広川町 | 4 | ○ | |
| F工房 | 八女郡広川町 | 3 | ○(息子) | |
| G工房 | 筑後市 | 3 | ○(娘) | |
| H工房 | 筑後市 | 1 | △ | |
| I工房 | 筑後市 | 3 | ○(息子△＋外部から○ ) | |
| J工房 | 久留米市田主丸町 | 4 | ○(息子△＋外部から○ ) | テレビ出演有り、小学校と提携し毎年の卒業制作 |
| K工房 | 八女郡広川町 | 1 | | |

写真１：A 工房外観および作業状況

写真２：B 工房外観および染釜の状況

### 2.3 久留米絣の周辺状況

他の織物業界と同じく、衰退している状況が久留米絣においても見られる。伝産品としての久留米絣、また機械織りを含めた久留米絣全体としても大幅に減少している。図２図３に近年の生産反数のグラフを示す。

## ３．調査概要

表２に記載の施設に各項目について聞き取り調査を実施した。

表２：調査対象と聞き取り内容

| 調査対象 | 聞き取り内容 |
|---|---|
| 技術保持者の在籍する工房 | 後継者の有無、売れ行き、対外活動状況、近年の取り組みと課題 |
| 久留米絣組合事務所 | 絣生産反数、イベント状況、近年の取り組みと課題 |
| 久留米絣技術保存会 | 技術者数、技術保持者の増減、工房の増減、組織の活動内容と課題 |
| 久留米絣の販売や展示を行う施設A | 利用状況、実施している取り組み |
| 久留米絣の販売や展示を行う施設B | 利用状況、実施している取り組み |

## ４．調査から見えてきた現状

### 4.1　久留米絣全体の課題

調査の結果明らかになった久留米絣全体の課題は以下の５つにまとめられる。

（１）　生産反数の減少

図の２・３に示すように生産量は右肩下がりに減少している。久留米絣全体では２００２年に１３７，４５４反生産されていたが２０１６年では８３，０９７反に。無形文化財久留米絣は２００２年に１２０反生産されていたが２０１６年では５０反に減少している。

（２）　販路の変更

絣の売れ行きの減少に伴い、販路に変化があり、伝産品としての久留米絣は生産反数の減少が強いられている。以前は久留米絣技術保存会が買い取り、卸売業者に流していたが、現在は重要無形文化財認定後に各工房に返還され、各々が顧客や小売店に販売している。（図４）これにより新たな顧客の獲得は各工房の役割となり、販売に関しては組合、技術保存会共に販売を促進するサポート体制が整っていない。買い手が増えないままでは、生産反数も増加する見込みは少ない。

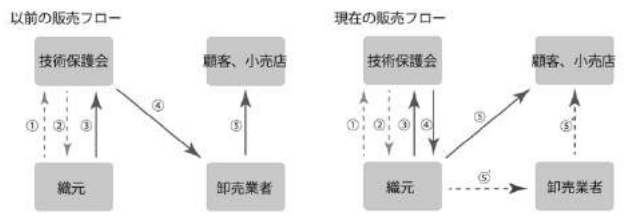
（３）　購買層の高齢化

年に数回イベントを開き、毎年新たな製品の発表や絣を使ったファッションショーなどを行なっているが、イベント参加者のほとんどは年齢層高めで、新たな顧客獲得につながっていない。若年層向けの技術体験等のイベントはあまり見られず、小学校での特別授業などは各工房が独自に行う他なく、各団体や施設が協力して工房をサポートする体制が整えられていない。これでは新たな顧客発掘や次の世代に向けての準備が不十分である。5)

（４）　情報発信力の不足

国の重要無形文化財の指定を受けているという事実や、久留米絣を作る工程、技術を知ってもらう機会があまり作られていない。また、新たな顧客発掘のためにも現在の情報発信力では不十分である。また、織物業界内での

工夫は各工房が行おうとしているが、他業界と協力した




※注：①絣のデザイン案提出

②デザインの認可

③製作後、絣の提出

④伝統工芸品としての久留米絣認定

※注. ここで以前は組合が買い取り、卸売り業者に販売していたが、現在は織元へ返還され、各工房が販売している。

図４：販売フローの変化

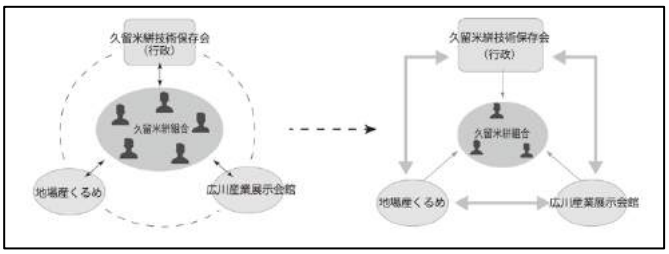



図５：絣組合中心の関係図概略

図６：昭和４４年工房位置プロット

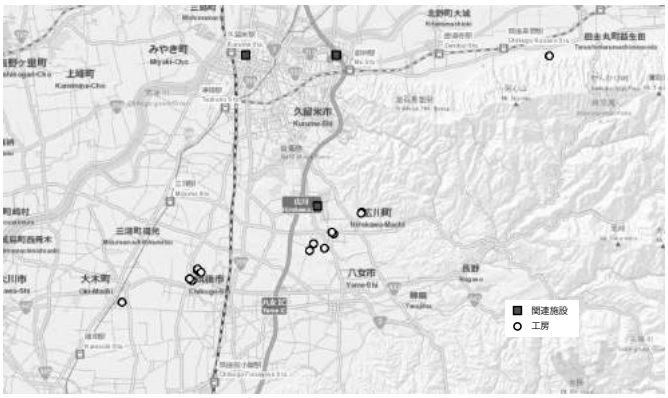
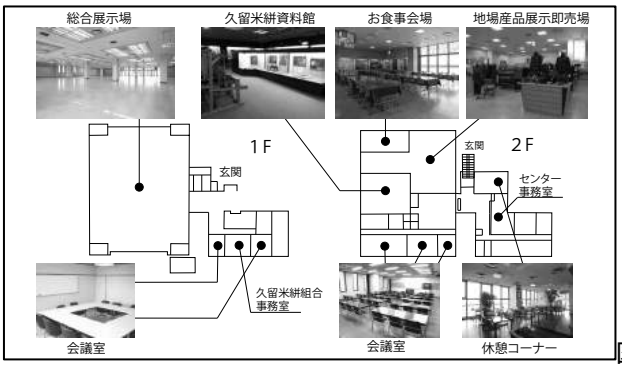



図７：平成１５年工房位置プロット

写真３：施設Ａ・Ｂ 外観写真




図

８ 施設Ａ 略図

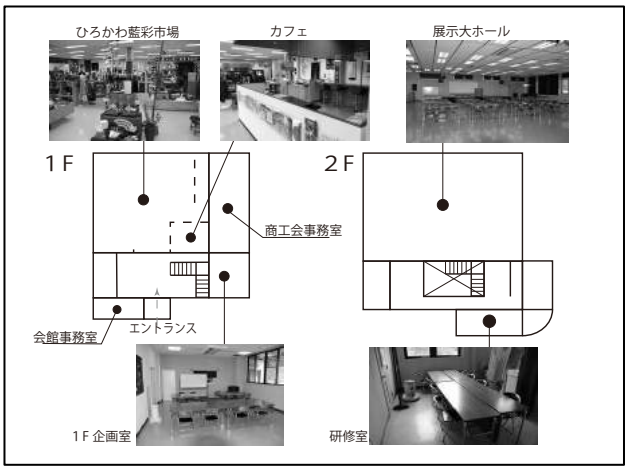



図９：施設Ｂ 略図

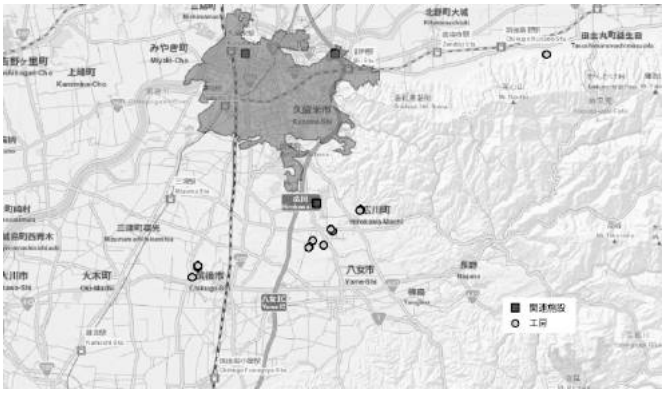



図 10：平成３０年度久留米市 DID 及び工房位置プロット

事例が久留米絣にはあまり見られない。同じ福岡県内が産地の小倉織はホテルや空港の内装のデザインにも使用されるなど、新たな市場を見出している。織物業界と他業界の協力があればもっと多くの価値を見出せるはずであり、実現のためには工房単位ではなく、久留米絣業界全体で情報を発信する必要がある。

(5) 連携体制の不整備

以前は作り手側の絣組合に活気があったため、絣組合を中心として、それぞれの施設、技術保存会に連携を取り、活動を行なっていたが、以前ほどの活気がない現在は、各施設と保存会が連携を取り、絣組合を支え、活気付けていく必要がある。(図５)

### 4.2 各工房の課題

現在、技術保持者が在籍する工房の数は１１件。５０年で５件の工房が減少しており、技術保持者は約２０人減少している。

現存の工房のうち後継者が決まっている工房が６件。後継者が居らず、現在の代が終わると工房を閉めることになる工房が３件。他２件は親族が一般企業に就職し、戻ってくれば後継者になってもらうという状況である。現状のままだと、少なくとも３件は現在の代で工房をたたむことになってしまう。(表１)。

聞き取りを行い、技術者から出た悩みの多くは売れ行きの話である。それぞれの工房が絣を使った小物や洋服の提案などを行なってはいるが、売れ行きは今一つで、新たな顧客の獲得にまでは繋がっていない状況であった。工房により差を感じたのは、対外活動への積極性である。後継者が決まっており、中でも親族以外からも弟子を取り、技術を伝承している工房は、工房独自の個展の開催、地域の小中学校への特別講義などの教育活動、テレビや新聞などのメディア露出等の対外活動が盛んに行われていた。どの工房も盛んに対外へ PR しやすくなり、また絣業界全体も常時公衆の目に触れるような施設や機会を業界全体で作る必要があると考える。

### 4.3 関連施設の課題

現在、久留米絣に関連する主な施設は３つ。

１つは、久留米絣技術保存会の入っている久留米市役所。残りの２つが久留米絣の展示、販売を行なっている施設 A、施設 B である。両施設共に大きなスペースを持ち、久留米絣のイベントの際には大きな会場として利用されるが、イベント時以外は使われることがなく、無駄なスペースになってしまっている。(図８,図９) 施設 A には、久留米絣の歴史や技術を展示した小さな資料館が設けられているが、地域の小学生が社会科見学に訪れるくらいで、他の利用者はあまり見られない。また、A、B どちらの施設も市街地から少し離れた場所に位置しており、公共交通機関によるアクセスも難しい。高速道路のインターチェンジからは近いものの、気軽に足を運びやすいとは言えない。これでは、もとより目的を持った人の出入りはあっても、新たな顧客の獲得は難しいと言える。久留米市の DID を見てみると、２つの施設は人口集中地区の外縁部に位置していることが分かる。(図１０) 市街地に施設を設けることができれば、利用者の増加につながるとともに、久留米絣自体への関心や、新たな顧客の獲得にもつながると考えられる。

現状、久留米絣を使った新たな試みは、各工房に委ねられている。対外活動や絣を使用した新製品の提案、開発も施設側から促し、サポートする仕組みが必要であると考える。

## ５．まとめ

4.1 や 4.2 で述べたとおり、他の織物業界同様に、久留米絣にも右肩下がりの状況が見られる。しかしこのような状況が続く中で、4.3 で述べたとおり既存の施設はイベント時の場の提供という役割以外で、解決に向けて機能しているようには見受けられない。この現状は如何なものかと思われる。

課題を解決するために、既存の施設を抜本的に計画し直すことや、解決するための機能を持つ新たな施設を計画することが解決策として考えられる。若い世代の力や、他の企業や技術の力を呼び込み、最盛していくために、もっと大衆に向けて PR する力を持つ新たな施設の計画が必要であると考える。また設計者は現地に足を運び、周辺調査を行った上で、本当に必要な施設はどのようなものかを検討し、市民や関係者と一緒に作る必要がある。

例としては、中心市街地に施設を構えることにより宣伝力を持つ施設を計画すること、技術を体験する機会を与えられる施設にすることなどが考えられる。

これにより、市民の目が久留米絣に触れる機会が増え、久留米市には久留米絣という誇れる伝統があるとの自覚を市民の中に刻み、久留米市のシンボルとしての役割を持たせることができると考える。


### 謝辞

本研究を進める上で久留米絣技術保存会、久留米絣組合、各関連施設の担当者の方には度重なる調査にご協力いただいた。

末尾ながら記して謝意を示します。


### 参考文献


１）米光靖氏:伝統的工芸品産業の振興についての考察 : 有田焼、博多織、京都の伝統的工芸品産業全般を事例として

２）靖浩氏:伝統工芸品産地の産業集積としての特徴と課題に関する研究 ―丹波焼産地と小鹿田焼産地を事例にして―

３）中村健一：久留米絣２００年のあゆみ 久留米絣２００年祭実行委員会、pp7

４）久留米かすり公式 HP ＜http://kurumekasuri.jp＞

５）久留米絣組合連合会：アンケート報告書



* 山口大学工学部感性デザイン工学科　学部生

** 山口大学大学院創成科学研究科 助教

***山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士（工学）

****山口大学大学院創成科学研究科 講師・博士（工学）

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Assistants Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ.

*** Prof., Graduate School of Science and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

**** Lecturer, Graduate School of Science and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.